

0023-03

会場：303

時間：5月23日 14:15-14:35

## 男鹿半島・大潟ジオパーク構想

渡部 幸男, 白石 建雄, 永井 登志樹 ほか

男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会

男鹿半島は日本海沿岸地域（グリーンタフ地域）新生界の標式地であり、地層群は日本海の出現を含む約 5000 万年間にわたる大地のドラマを連続的に伝えている。大潟村の広大な農地は日本最大の潟湖（八郎潟）の湖底が干拓されることによって半世紀前に出現した新しい人工の大地であり、肥沃な湖底堆積物の上で大規模農業が展開されている。かつての八郎潟の記憶は干拓記念水位塔をはじめとする各種のモニュメントを通して現在に伝えられている。

これらの地域は第四紀には圧縮応力場におかれ、非常に激しい地殻変動が進行している（日本海東縁変動帯）。このことを反映して男鹿半島には 42 万年前以降の 3 タイプの第四紀火山（戸賀火山、目潟火山、寒風火山）が存在し、新しい地質時代の地層は大きく変形している。これらの地層は陸成層と海成層の規則的なくり返しから構成されており、世界的大規模気候変動（氷期／間氷期）に連動した海水準の変動をよく記録している。堆積物中には 4 枚の広域テフラが挟まれており、日本列島では破局的巨大が何度も起こっていたことを認識する上でも重要である。また男鹿半島の海成段丘地形は大きな隆起傾向を物語り、八郎潟の地下地質はここが沈降地域であることを伝えている。以上のように、男鹿半島・大潟地域は日本列島が活動中の変動帯であることを認識する上で非常に重要な地域である。

進行中の大地の変動はここで生活している人間に度重なる災害を及ぼしてきた。1983 年日本海中部地震時の津波による多数の人命の損失と液状化による地盤災害は記憶に新しい。さらに 1939 年、1810 年にもこの地域の近傍を震源とする直下型地震によって大きな被害を被っている。これらの事実は多くの慰霊碑・記念碑の形で後世の人々に伝えられている。

以上のように男鹿半島・大潟地域はジオパークとしての素材に恵まれており、我々はこの地域を人々が大地の物語、大地とひとの物語、大地の恵みの物語と出会う場所として構想している。平成 22 年度以降、民間団体によるジオツアーやフォーラムが積み重ねられており、さらに地域の小学校における教育活動にも活用されている。現在はさらにガイド養成講座、市民を対象とした「ジオパーク教室」などの試みが進行中である。